〈論 説〉

変容する回族の社会化

―婚姻や労働における女性の役割を通じて―

西　村　一　真

序論

本論文の研究対象である回族とは、中国の少数民族の一つであり、チワン族に次ぐ中国の少数民族中第２位の人口（1000 万人以上）を擁し、その居住地域はきわめて広範に及んでいる[1]。回族はムスリム（イスラームを信仰する民族）であるが、都市部の多くの回族は、敬虔なムスリムではないとされている。したがって、現在の回族社会の考え方としてマジョリティな存在である漢族に “社会化[2]” されているということが前提として言える。ここでいう “社会化” とは漢族に同化すること、すなわち衣服や食生活などあらゆる面で漢民族らしい社会生活を送ることである。

近年では、奈良の雲南省における回族大学生を対象としたものなどから回族の社会生活の実態が見られており、雲南省昆明市におけるイスラーム復興運動を担う学生の多くが、必ずしも敬虔なムスリムではないことが分かっ

[1] 横山廣子が記した馬寅編、君島久子監訳『概説中国の少数民族』三省堂より。

[2] 昨今の回族有識者の間では “漢化” と表記するのが定番ではあるが、あえて社会化という表記をさせていただく。

た。普通教育の振興、異性との出会いなど様々な目的を持った回族による部分的な利害の共有により展開されており、回族はいわゆる “社会化” をしていると指摘した（奈良 2013：33-47)。回族と漢族の地域組織や職場での交友関係が深まり、また回族自体の宗教意識が弱体化し、雲南省昆明市において多くの回族が社会化している状況だという[3]。昆明市の回族でしっかりとした礼拝が出来るものは３割もおらず、さらに、雲南省の回族の間では、普通教育が宗教教育より重視されている。学生の中には、勉強の妨げになるという理由で、親からモスクに行くことを禁止される者もいるそうだ（奈良 2013：36)。都市部以外に目を通して見ると横山などは、回族の人々は、衣食住を含む風俗習慣などに対し厳格に守る姿勢を持っていると主張している（横山 1987：50)。このように都市部の中間層以上の少数民族と田舎のステレオタイプな貧困層の少数民族ではもちろん見解も違ってくる。

今回本論文では、中国社会における回族、漢族の女性の役割に着目した。鳥山は家庭内を「ジェンダー役割」と「社会経済的役割」という二つの分け方をし（鳥山 2010：278-280)、家庭内のジェンダー役割とは中国の場合、「男は外、女は内」という儒教思想に基づく考え方であり、そこにイスラーム的な婚姻外での性交の禁止なども含まれる社会経済的役割となる労働力として家庭外での就労の意味も含まれる（鳥山 2010：278-280)。

人類学や民俗学的な回族の研究においては、実際に 20 世紀後半までの日本の回族に関する論文は圧倒的に男性が多い。根本的なことであるが、男性の研究者が多いということは、話しやすい調査対象者も男性であるということになる。やはりフィールドワーカー自身が男性を主体として知らず知らず

[3] 他にも陝西省西安市などでは、喫煙に対して寛大な理解を示す回族がいることなどを今中崇文から伺った。

のうちに物事を見てしまう傾向は多くなると思われる。しかし、 2022 年現在の国際社会情勢的にジェンダーという観点から目を逸らしてはならないだろう。

本論文ではまず、一つ目の問題意識として、先ほど回族の社会化という単語を出したが、未だ回族が社会化していない、いわゆる敬虔な回族女性が居るコミュニティにおいて「女性の役割」はどういったように社会化しているのかという点について考察したい。中国全体に目を通して見れば、男女平等という観点は、もともと中国共産党体制になって以降常に謳われ続けてきた課題であり、80 年代以降の市場経済発達により多少の歪みはあったものの、漢族の女性の社会的地位はある程度上げられてきた
(鄭 2012：155)。

二点目に、回族などの少数民族の婚姻における社会化である。回族研究は国内外問わず社会科学の分野において幅広く発展していき、19 世紀後半から 21 世紀の間に壮大な飛躍を遂げた。その一方で現在も不透明なものが、「女性の役割」と「回族と漢族の通婚による同化現象（社会化)」である。その点において、敬虔なムスリムである回族の婚姻と漢族の婚姻、また通婚の事例を紹介しながら、考察していきたい。

三点目の問題点として、浙江省義烏市でネットショッピングの運営をして家の中で働く回族女性の事例を紹介し、彼女たちにとっての社会とは何か、役割とは何か、ということを漢族女性の役割と比較しつつ解説していき、最後にまとめさせていただく。

１章　社会化する回族と敬虔な回族

1-1. 現在の回族の現状―社会化する回族たち―

回族はムスリム民族として集団の自意識が信仰する宗教に基づいている特異な存在であるとされる。しかし、序論で前述したように回族はマジョリティな存在である漢族に同化するという社会化が進んでおり、豚肉は食べないが礼拝や断食は実施しないムスリムとしての自己認識すら持っていないというような人々が存在する状況が生まれている（松本 2010：38)。また、漢族の通婚の増加や漢文化の影響が、回族の宗教意識の弱体化などの社会化を引き起こしているといったような状況が生まれている（奈良　2013：36)。

奈良によれば、近年雲南省昆明市などでは専門的なイスラーム教育を経たイスラーム教の宗教指導者であるアホンたちの宗教的権威の衰退、さらにイスラームに対する考え方の変化により、一般的な学習能力が高いとされる、いわゆる「文化」のある大学生が回族社会において影響力を発揮しうる状況が生まれている。アホン[4]は中国のイスラーム教徒の間では，宗務者の位階の一種で，清真寺（モスク）の教長になる資格を有するものをいう。昆明市に住むアホンＡによれば、学生に宣教活動を任せるのは、アホンたちにとってはイスラームを専門的に学んでいない大学生に宣教活動を任せるのは本意ではないが、担い手が居ないため、彼は大学生に依存せざるを得ない状況となっている（奈良 2013：41)。

つまり状況としては、その辺にいる回族大学生の方が、アホンより教理に関する知識を持っているため、仕方なく回族大学生に宣教活動を任せている

[4] 回民は清真寺を中核として集住するのがふつうであり，各清真寺に所属する回民の宗教的生活を管理指導する宗務者をアホンという。

ということである。アホンはイスラームの復興を目指し、支援者の一般信徒は普通教育の振興を目的とする。

しかし、難点なのは、多くの社会化した回族大学生は異性との出会いを求めて支教活動を行っている。回族大学生たちにとっては、交流がメインで支教活動は所詮、出会うためのきっかけと考えられている。都市部の中間層である社会化した回族大学生にとって、異性との出会いの機会を得ることもまた切実な問題である（奈良 2013：43）。

このように見ていくと、ほとんどの都市部で回族は既に社会化したと捉えるのが自然ではある。漢族と社会化した回族と敬虔なままの回族のアクター、及びその亀裂は、現在も尚、漢化よりの発展の最中にあると考えられ、発達した都市では漢族に同化し社会化する姿勢がやや強いだろう。

しかし、後述するような女学の回族の例を見ると、中国全土が完全な社会化をしたとも言えないのではないかと思う。また、農村地域では、従来のイスラーム教義を重んじている敬虔なままの回族が多くいるだろう。

1-2.　諸民族イスラームから分かる本来の “敬虔さ” ―神戸のムスリムモスクＡへの１日フィールドワークを通して―

漢族に回族が社会化するとして、従来の回族以外の敬虔なムスリムとはどのような人々なのか。世界のムスリム（イスラーム教徒）人口は 2020 年時点で 19 億人[5]に達し、単純に考えて世界人口の約４人に１人はムスリムである。敬虔な回族の外見こそは一般的な漢族と変わらないものの、内面的な部

[5] 『ムスリム旅行者おもてなしガイドブック―日本とイスラームをつなぐための３つのこと』東京産業労働局より。

分になってくるとイスラーム教義を重んじているため、諸民族イスラームとそこまで大きく変わりはないだろうと考えている。

実際に伺ってみないと分からないことも多いため、諸民族イスラームの調査をしていけば回族に繋がる手掛かりがあるのではないかと思い、2019 年に神戸のムスリムモスクＡを取材した。調査日は 2019 年の 10 月８日火曜日、12 時半頃に訪問した。そのモスクは JR 三ノ宮駅から徒歩数分ほどで、比較的閑静な住宅街にある。日本のムスリムモスクの中でもかなり歴史が長いところであり、国内のモスクの中ではかなり知名度は高い。近くには他にキリスト教系の寺院や同じくイスラームの宗教寺院、生田神社などがある。

住宅街にあるにも関わらず、建物は荘厳な様子で、男性は入ってすぐの１階、女性は２階と分かれており、筆者が入ったとき、教長の方を含めて男性は５人程度だった。女性も同じくらいの人数が居たようであることはなんとなく分かった。ムスリムモスクＡの教長と思われる人物はいかにもステレオタイプな白装束姿に髭を生やしていたが、日本語は比較的上手く、彼が受付等の事務作業もしているようで、あまりに忙しそうにされていたため後述する所蔵物がどういったものかということぐらいしか聞けなかった。その代わりに礼拝しに来ていた 50 代のバングラデシュ出身のムスリムであるＢ氏に話を聞くことが出来た。ここに来る大半は、日本に在住の外国人ムスリムであるということが分かった。

Ｂ氏は平日には普通の仕事をしており、休みがあればいつも礼拝に来ているようだった。彼の故郷のバングラデシュでは 88％の人がムスリムであるという。Ｂ氏は日本語もそれなりには話せる人物だった。筆者が来訪したとき、礼拝の真っ最中だったので、Ｂ氏が察して招いてくれた。礼拝の作法は、まず座り頭を下げ、また立ち上がり万歳のようなポーズを取るといった形で、それを何度も繰り返す。

10 分ほどすると、礼拝が終わりＢ氏と互いの自己紹介をした。そのあと「どこから来たのか、どこの学生か」などと質問をしてきた。どうやら、彼の話によれば、この前も近隣の大学からイスラームに改宗した学生が居たらしい。また、多い時では週に４人ほどがこの寺院に改宗に来るそうだ。改宗を勧められたが、なるべくオブラートに包み断った。

またＢ氏は、「仏教もキリストも神などではなく、アッラーこそが唯一神であり、ムスリムとなり信仰すれば、自分を正しい道へ導いてくれる。礼拝をすることで多くのムスリムが規律を守るようになり、社会の秩序が保たれる」と熱弁していた。

自分のような熱心な信徒は珍しいことではないと自身で主張していた。またこのムスリムモスクＡには、第二次世界大戦時のこの地域の空襲の写真なども飾ってあり、他にもクルアーン（経典）などが大事に所蔵されていた。

このように、外観や男性が熱心に信仰する様子などは過去の１日フィールドワークからも察することは出来たのだが、肝心の女性がモスクでどういったことをしているのかという点においては、幅広い年齢層のムスリムが礼拝をしに来ているという事実に留まってしまった。むしろ、２階にある女性のたまり場を意地でも神秘的な場所にしようとする姿勢を強く感じ、「女性と男性を隔てる特殊な空間」であることは、当時強く痛感した。日本のモスクに来るような人々は、特に敬虔なムスリムである。本節の最初で述べた通り、従来のムスリムと回族との違いは、漢族と同じ顔つきのため見た目では分からないことがあること、敬虔の度合いなどによって服装や食生活も違ってくることを再認識する姿勢をした。

１-3. 女学に通う回族女性からみる社会化

回族女性の役割とは何であるのか。公教育だけでは女性の権利を守ることが出来ないと考え、そのような人々のために女学[6]が存在する。女学では、さまざまな階層・年齢層のムスリムが通っており、女学の多くがモスクの付属機関であり、そこにおいてアラビア語や中国語、またイスラーム的倫理観を学んでいる。中国ではそれぞれ清真女寺（女性専用モスク）、女学と呼ばれて、沿岸部の河南、河北、北京、山東を中心に 300 年余りの歴史を培ってきた（松本 2010：50）。

その根源は明末清初（17 世紀）、イスラーム知識人の劉智が女性の教育が必要と説き、女性の家長・夫への絶対服従を著作に書いた。この教えは、保守思想ではなく、アッラーの他者への服従こそがアッラーの命に忠実ということであり、このような現世の秩序を守るのは「善事」で死後の永遠の来世に繋がると考える。女性にイスラーム的考えを「婦道」を教えることで、女性の手で家庭に宗教が入り、家庭をモスクと宗教活動に呼び込む戦略がとられた（松本 2010：50-51）。

民国時代に中国イスラーム界では女性の「母性」と子供に対する教育者としての役割が女子教育振興に関して強調されるようになり、流行語であった「良妻賢母」[7]言説が受容された。さらに時代が流れ、現代のイスラーム覚醒現象においては新しい「良妻賢母」が女性の理想像とされる。家庭と女学における倫理的教師としての女性の役割こそがこの汚濁と矛盾に満ち溢れた現世を改革する重要な鍵と考え、女性にイスラーム知識を持たせることで「世直し」の中心的存在に育てようとする考え方である（松本 2010：55）。

---

[6] 「女校」や「女子学習班」などとも呼ばれる（松本 2010：49）。

[7] 中国では「賢妻良母」と言われるが、本論では日本の良妻賢母の表記にさせていただく。

コーラン（クルアーン）の第 24 章 23 節にこのような記載がある。

無分別に貞節な信者の女を中傷する者は、現世でも来世でもきっと呪われよう。彼らは厳しい懲罰を受けるであろう。

また同 24 章の 31 節にはこうある。

彼女らの視線を低くし、貞淑を守れ。外に表われるものの外は、彼女らの美や飾りを目立たせてはならない。（中略）
また、彼女らの隠れた飾りを知らせるため、その足で地を打ってはならない。あなた方、信者よ、皆一緒に悔悟してアッラーに返れ。必ずあなた方は成功するであろう。

コーランを読めば、イスラーム諸民族の人々がアホンとして仕事を全うする意志が強く表れているのだということが分かる。恐らく、先ほどの筆者の体験を通して確認したバングラデシュのムスリム男性のように、責務として本心から進んでやっているという意思に近い。西北の都市部ではこうした敬虔な回族としてライフスタイルを確立している女性も居るということは、今後の回族社会、少数民族社会にとって伝承的な面で大変安泰だということではあり、教義としてのイスラームが強いが故に、あまり社会化されていない地域もまだまだあることが分かる。

２章　回族同士の婚姻、漢族との通婚から考える社会化

2-1. 昆明市の敬虔な回族男性の婚姻事例から読み取る

回族同士の婚姻のフィールドワークを行った奈良の資料を読み取っていく。今回取り上げる 20 代の敬虔な回族男性と同じく 20 代の回族女性の結婚

であり、男性は調査者である奈良と仲が良かったようである（奈良 2016：234)。イスラームとしての婚姻と中国人としての婚姻で別々の日に式が執り行われ、2009 年の 11 月 21 日と 12 月 19 日のものであった（奈良 2016：237)。

ムスリムの婚姻には５つの条件があるという。それは

(1) 共通の信仰、新郎新婦がムスリムであること

(2) 両家の両親の同意

(3) 新郎新婦が結婚を望んでいること

(4) 二名以上の成人男性からなる婚姻の立会人が居ること

(5) 新郎側から新婦側への結納

といった五つであり、これに加え、アホンが新郎新婦とそれぞれの両親にこれらの条件が満たされているかを確認し、満たされていれば婚姻を承認し祝福をする（奈良 2016：237)。

中国のイスラーム意識を持つ民族も、地域差こそあるかもしれないが、諸民族イスラーム同様に、婚姻に至るまでの儀式の多さ、その過程には驚かされる。

さらに奈良の調査によれば次のような言葉が式の教長から告げられたという。

「中国のムスリムの結婚は３つあります。それはイスラームの結婚、法律の結婚、中国の結婚です。但し、私たちムスリムにとって最も重要なのは、イスラームの結婚です」（奈良 2016：237）

続けて教長が、「これから婚礼などで非ムスリム、漢族を招待することもあると思いますが、イスラームに則った婚礼を行っていただきたい、特に飲

酒については注意してほしい」と言いその後祈りを捧げ、ニカーフ[8]は終了したという（奈良 2016：237-238）。

イスラームとしての威厳を保っていると同時に、中国という国柄、教長の言葉から回族社会への配慮が感じられる。この新郎の男性は後述する中国式の婚姻の披露宴でも、ワインを飲まず、飲んだふりをして水を飲んでその場しのぎをするような人物であり（奈良　2016：241）、敬虔な回族ではあるが、漢族社会に対してもある程度の理解を示している。このように回族側が、漢族社会に「取り囲まれる」というよりも、回族が漢族側に「合わせにいく」といったような姿勢も見受けられる。

2-2. 中国式の婚礼のプロセス

先述した通り、１か月後に引き続き先ほどの二人が、昆明市の婚礼などで使う比較的大規模なパーティを行える大きなハラール[9]レストランで、「中国式の婚礼」を行った。こちらの婚礼の方が多くの漢族が来ていただろう。準備に際しては、新郎の同級生や奈良らが事前に７人ほど集まり、参列者に配るための喜糖[10]やタバコを準備していたという（奈良 2016：239）。

タバコは嗜好品ではあるが、日本の場合だと冠婚葬祭の場で配るようなものではないので、中国の中間層の間では、貰ってうれしいもの、好まれているものだと解釈される。

---

[8] ニカーフとは、すなわち、結婚の宣言と呼ばれている。「イスラーム法に基づいての結婚式」（2022 年９月 30 日（金）閲覧）https://www.ahmadiyya-islam.org/jp/

[9] イスラームにおいて食べることが許されている料理。（2022 年 10 月２日（日）閲覧） https://eleminist.com/article/1469

[10] 知人や職場の人などに配る飴。

酒については注意してほしい」と言いその後祈りを捧げ、ニカーフ[8]は終了したという（奈良 2016：237-238)。

イスラームとしての威厳を保っていると同時に、中国という国柄、教長の言葉から回族社会への配慮が感じられる。この新郎の男性は後述する中国式の婚姻の披露宴でも、ワインを飲まず、飲んだふりをして水を飲んでその場しのぎをするような人物であり（奈良 2016：241)、敬虔な回族ではあるが、漢族社会に対してもある程度の理解を示している。このように回族側が、漢族社会に「取り囲まれる」というよりも、回族が漢族側に「合わせにいく」といったような姿勢も見受けられる。

2-2. 中国式の婚礼のプロセス

先述した通り、１か月後に引き続き先ほどの二人が、昆明市の婚礼などで使う比較的大規模なパーティを行える大きなハラール[9]レストランで、「中国式の婚礼」を行った。こちらの婚礼の方が多くの漢族が来ていただろう。準備に際しては、新郎の同級生や奈良らが事前に７人ほど集まり、参列者に配るための喜糖[10]やタバコを準備していたという（奈良 2016：239)。

タバコは嗜好品ではあるが、日本の場合だと冠婚葬祭の場で配るようなものではないので、中国の中間層の間では、貰ってうれしいもの、好まれているものだと解釈される。

---

[8] ニカーフとは、すなわち、結婚の宣言と呼ばれている。「イスラーム法に基づいての結婚式」(2022 年９月 30 日（金）閲覧）https://www.ahmadiyya-islam.org/jp/

[9] イスラームにおいて食べることが許されている料理。(2022 年 10 月２日（日）閲覧） https://eleminist.com/article/1469

[10] 知人や職場の人などに配る飴。

雲南省における「中国式の婚礼」は一般に三つのプロセスから成るそうで、

(1) 新郎と親友らが「花車」に乗って新郎の家に行き、新婦を新郎の実家に連れて帰り

(2) 披露宴としての婚礼をし

(3) 「鬧房[11]（naofang)」をする（奈良 2016：239)。

中国のいたって一般的な結婚式のやり方である。

2-3. 回族の婚礼のプロセス

回族の結婚に関わる主要条件として、白の文献をもとにし、首藤がまとめた先行研究には、次の５つが挙げられる。

(1) 宗教からの観察―結婚を「瓦直卜（ワージブ)」（礼拝、断食、契約の履行、ジハードなどと並ぶ信仰上の義務行為)「スンナ慣行」（慣習・教派）と捉えたり教派や門宦神秘主義教の教団に従い、結婚を通じて社会の安定、秩序、の維持、婦女の保護などに貢献すると捉えたりする結婚観

(2) 社会規範からの観察―族内婚、族際婚、包弁（請負）結婚、簡素な結婚登記、仲人の役割、自由恋愛、近親婚、早婚や晩婚などを社会の安定や秩序の維持などに結びつけて捉える結婚観

(3) 結婚の社会的機能からの観察―愛情、愉悦、喜び、楽しさなどの感情の基礎として、また成長や自我の完成など幸福、自立や自己表現をしたり、子孫繁栄、父母、家族親戚、両家の願い、社会の安定などを満たす契機として捉える結婚観

[11] 友人らが新郎新婦の寝室に行き、セクシャルなゲームなどをさせてからかわせること（奈良 2016：272)。

(4) 夫婦関係からの観察―性別の分業や平等、相互の尊重、包容、理解、関心、自立、恩愛、信任、忠誠、扶助、学習、夫婦、切磋琢磨などのあり方にかかわる結婚観

(5) 結婚儀礼からの観察―結納、契約、ニカーフ（結婚儀式＝結婚の宣言）など儀礼や典礼に関わる結婚観などがある（白 2015、首藤 2021：50）。

2-4. 鬧房において―漢族のように振る舞うこと―

先述の回族同士の婚姻事例において、奈良の記述で一番疑問に思ったのは、披露宴が終わり、皆が帰った 20 時過ぎに新郎新婦の近しい友人たちだけで鬧房（naofang）が行われた際のことである（奈良 2016：242）。これに関しては、あくまで行き過ぎた事例であり、漢族の婚礼の文化でもなく、2009 年という時代であったことを踏まえた上で、見ていただきたい。　奈良によれば、友人たちが用意したゲームは、新郎の股間に挟まれた空のペットボトルの入り口に目隠しされた新婦が口にくわえた割り箸を入れるといったようなことで、酒を飲んでいた友人たちは新郎新婦を囃し立て、さらに次のゲームとして、ベッドの上で、股間にアルミ製の灰皿を挟んだ新婦を寝かせ、股間にグラスを挟んだ新郎がそのグラスで灰皿を打ち鳴らすという性交を模したゲームも行われ、照れながらも一応はそれなりに楽しそうだったらしいが、本当のところは分からないだろう（奈良 2016：242）。

奈良の同行者は、こういったことは漢族の文化であり、ムスリムの婚礼ではないという（奈良 2016：242）が、これは決して漢族の文化でもなくムスリムの文化でもない。そこだけは強く主張していきたい。あくまでも行き過ぎたセクシャルハラスメントの一部の特殊な事例であったとされ、決して中国的な文化ではなく、現在では法律で固く禁じられている。

この「中国式の婚礼」において食事がハラールであったこと、彼らの服装がイスラーム風であったこと、飲酒を避けたことなどを除けば、イスラームが強調されることがなく、新郎新婦は漢族のように振る舞うことを求められた（奈良 2016：242）。

こういった場面において、彼らは基本的には回族であるのだが、日常のあらゆる場面で「漢族らしさ」を求められ、イスラームの教義に反することをしなければならなくなるというのは、歯がゆい問題である。

2-5. 漢族と回族の通婚―漢族との通婚に対する忌避感―

敬虔さを基準にすることで、回族とムスリムを異なるカテゴリーとする言説は、その一方で、このように昆明市の回族にとっての主要な非ムスリムである漢族との関係に変化をもたらし、それは回族と漢族のとの境界が顕在化する主要な局面である婚姻においても見受けられる（奈良 2016：262）。

昆明市の回族の間では、漢族との結婚に対する忌避感がある。言い換えれば、族内婚を好むことがあるといい、本論でも第１章の１節で取り上げた回族大学生の宣教活動が若い回族学生同士の出会いの場所になっているという側面は、そうした危機感から来るものである（奈良 2016：263）。

その一方で漢族との通婚を許容することもいくつかあるといい、漢族がムスリムに改宗して、多少のいざこざは想定されるものの、当人同士が望んだことは受け入れるという例があり、もちろん反対に漢族との結婚を望む回族が家族に対して交渉するケースもある。漢族との通婚に対する強い忌避感が見られる一方で、許容可能とみなされる状況が生まれている（奈良 2016：264-265）。

回族側が漢族との通婚を拒んでいるという話は、少々の驚きがあった。このような状況は何故、生まれたのか。例えば、回族と漢族の民族的なギャッ

プ、文化的な差異が個々人の人生観において、植え付けられていたとしたら、普通教育、宗教的教育、普通教育に加え宗教的教育を受けた者、都市部の中間層の回族にはそれぞれのバックグラウンドがあり、また違った意味で、贅沢な悩みが存在してしまうだろう。また、漢族との結婚を拒んでいるということは、それだけ十分な回族としてのアイデンティティを持っているのではないかというようにも感じられる。こういった問題を解決するためには、幼少期においての回族と漢族の共通するコミュニティ、学校や施設などの環境がやはり大事になってくるのではないだろうか。　もう一つ地域差の側面から触れていくことも大切であるように思う。澤井によれば、寧夏回族銀川市においては、回族の男性が漢族の漢族の女性と通婚することは容認されているが、回族の女性が漢族の男性に嫁ぐことは避けられていた（澤井 2007：83)。

澤井はまた、1980 年代に入り、行政当局が婚姻法の施行を積極的に宣伝し始めると、回族の人々の婚姻規制にも少なからず変化がみられるようになった。例えば、現行の婚姻法によれば、父方・母方にかかわらず、 ego からみて上・下３世代以内の親族との結婚は「近親婚」として厳禁される。つまり、それは、シャリーア（イスラーム法）が許容する父系親族との結婚や漢族社会でも許容されてきた母方親族との結婚などが法制度上は実施できなくなったことを意味する。このような社会主義的な法的措置は、行政当局による人口管理や計画出産と密接にかかわっているという
(澤井 2010：60)。

さらに澤井は、回族の「近親婚」について補足しており、1980 年代以前は、都市部でも農村部でも、回族が同じ回族の結婚相手をなかなかみつけられなかった場合、同じ回族の親戚（おもに母方親族）との結婚を選好することが多かったと聞いたことがあるそうだ。

実際、現在でも、回族の「民族内婚」を重視する人々は、漢族（非ムスリム）との通婚を回避するために「近親婚」を選択することがある 21)。ただし、1990 年代以降は、おもに都市部の回族の人々は、漢族と同様、父方・母方を問わず、「親戚」との結婚を回避する傾向がある。おそらくこれは政府当局が宣伝する婚姻法（優生遺伝学）の規制を念頭におき、回族の人々自身が「近親婚」を意図的に選択しなくなったからであろうと澤井は述べた（澤井 2010：60)。

高は回族同士の結婚について、特に同じ地域や住居区に住む回族間の結婚こそが最も正統的であり、この形態は現在も維持されているとした。また、寧夏においては 2002 年時点で、「村内婚・同姓婚」というケースも増加しているようだ（高 2002：146)。　このように、回族社会においては身近な関係において婚姻をすることが好まれている。しかし、近年になってから、婚姻法の規制により近親婚の選択があまりなくなってきており、現在では民族の垣根を超えた婚姻、或いは敬虔な回族による独身を貫くライフスタイルの割合が増えてしまっている可能性もある。

また、コーランの 24 章 33 節にこのような言葉がある。

結婚の資金が見つからない者は、アッラーの恩恵により、富むまで自制しなさい。

都市部と農村で拡大する貧富の差が、現状結婚にも少なからず関わってきてしまっているのかもしれない。また、回族と漢族の通婚で、漢族がイスラームに改宗する通婚の場合、改宗後もしっかりとイスラームとしての生活に迎合出来るかという点では、おそらく多くの人間の協力が必要になるため、そこで親密的関係が培われる可能性は十分にあるだろう。

３章　働く回族女性、漢族女性から見るジェンダー問題

3-1. 浙江省義烏市の回族女性

浙江省義烏市[12]には移住した女性ムスリムたちが 20 代～30 代までの結婚適齢期である「全国で平均年齢が最も若い回族コミュニティ」がある[13]（李 2021：123）。

ここでは小（中）学校中退後、モスクの勉強会に参加し、18 歳になる前に結婚するというライフパターンが多数の女性に共有されている。育児や家事の重責と教育機会の制約が、彼女たちの社会進出を阻んでいる（李 2021：123）。　さらに、義烏市では通訳が職業として大変人気であるのだが、まわりから尊敬される仕事ではなく、義烏市の回族コミュニティ内で批判される。イスラームに基づくジェンダー観から見ると、家を経済的に支える責任がない女性が、男女の隔離に違反し外国人の男性バイヤーの通訳を務めることは「お金のことしか考えていない」と思われるのだという（李 2021：
123）。

また李によれば、女性たちは仕事や通婚を通じて義烏市に移住してきているといい、故郷から離れることは、親戚やコミュニティによるコントロールや結束力もある程度弱くなることを意味するのだという。そうすることで、異なる地域におけるジェンダーイデオロギーに触れ、再考するきっかけにもなるのである（李 2021：134）。

中国では中国共産党成立以降、男女平等を掲げ女性も労働を強いられた中、こういった地域、しかも未開ではなく、ある程度発達した都市で女性の労働に対する反発の現象が起こるのは興味深い。発達した都市というのは、

---

[12] 浙江省金華市にある県級市、日常雑貨の世界スーパーである。

[13] あくまで李の調査によるものであり、実際に最も平均年齢が若い地域かは不明。

程度の差こそあれ、「働く女性の理想像」のようなものが出てくると思っていたからだ。義烏市のイスラーム的な宗教思想は「男性はこうあるべき、女性はこうあるべき」といったような固定観念が生活の比重を大きく傾けている中、そのアクターに苦しむ人々が居るということは、おそらく漢族などの中立的な立場の人々が存在していると推察されるので、その人たちが今後この問題を打開する鍵になるのではないかと思う。

また、ジェンダーイデオロギーについて再考する機会を増やすのはとても良いことだと思うのだが、その後さらに、元の地域、つまりは故郷のイスラーム文化を再考するきっかけをどこかで作る余裕がある社会が理想的ではないかと考えられる。

ただ、先ほどの２章で書いたような回族の新郎新婦のように、イスラームの教義に忠実であるが故に、漢族とのアクターに悶えてしまうよりかは、このように清々しく働く女性たちが居るということの方が、よっぽど素晴らしいように思え、彼女たちの方がよっぽどアイデンティティをもっているように見える。

3-2. ネットショッピングで活躍する回族女性

前述した通訳を職とする女性からも、義烏市の回族女性は家庭外での長時間労働を求められていないことが分かる。そのような言説はコミュニティにおけるモスク中心の宗教言説とも一致しているが、彼女たちは、それに受動的に従っているわけではない。義烏市では、2015 年に４月にウィーチャット[14]で販売する「微商（ウィーチャット・ビジネス）商品」の開発に積極的に

[14] 中国人の約８割が利用しているメッセージアプリ。

取り組むクライシュ会社[15]を創設した。サウジアラビアから香水を輸入し、義烏市でパッケージした後ネットで販売を行っており、アルコールフリーの「ムスリム香水」として、人気を博してきた（李 2021：126-127）。

以下は、李がクライシュ社のビジネス運営を担当する回族女性にインタビューした際の一部である。

「家にいるムスリム女性たちは、微商を通じて、外の社会との接触を維持し、ムスリム友達をたくさん作れます。家族のために、頑張っているあなたの姿を見て子どももあなたをもっと尊敬し、旦那さんもあなたを大切にします。（中略）ムスリムの家庭の主婦たちにとって、ふさわしい仕事だと思います、でも信仰と家族よりビジネスを重視することは禁止です。（中略）ムスリム微商として、信仰第一、家族第二、商売第三、ということを忘れないでください。」（李 2021：128）

このクライシュ社の回族女性の言葉からも分かる通り、ムスリムとしての自覚を持ちながら、家族を大切にし、自分たちも「家の内側」で働いて貢献していくという、新しい社会の仕組みが義烏市を中心に作られている。こうした彼女らの会社の取り組みが、先を見据えていたわけではないが、コロナ渦になった 2020 年以降の中国社会において、最も得をすることになったのではないだろうか。信仰を第一に、夫や家族を第二にという姿勢は、日本の曖昧な共働きの関係より、よっぽど役割がはっきりしており、ジェンダー格差、差別という垣根はまだまだ超えないといけない部分はあるにしても、基盤がちゃんとしているように思える。

---

[15] クライシュ族はイスラームの創始者であるムハンマドの出身部族であるため、ブランド名でムスリム会社としての特徴をアピールしている（李 2021：138）。

3-3. 漢族女性にとっての労働

中国系移民についての研究を行っている奈倉は、2007 年から 2008 年にかけて、改革開放以降に中国から日本へ配偶者とともに、あるいは学位留学生としてやってきた漢族の女性に対してジェンダー観に関するインタビューを行った（奈倉 2021：193）。中心に漢族の女性一般的な考え方について見ていくと、1950 年代から 60 年代にかけて生まれてきた世代は、生産労働によってこそ社会に参加していると考える。中国では、教育を受けた女性が仕事をするのは当たり前で、教育を受けた人は社会に貢献するために生き、もし教育を受けたのに何もしなかったら、中国人にとっては屈辱で、女性にとっても屈辱であるといい、日本の女性が主婦であることを「家の仕事をしている」と答えたら驚いたという（奈倉 2021：194-195）。

前述した、共産党成立の毛沢東時代から、中国人女性にとって「専業主婦」というのは仕事ではなく、男女ともに仕事をするべきだという固定観念がある。

しかし、1980 年以降に生まれた世代は「日本の女性は偉いと思う。３人、４人子どもがいる母親でも文句を言わない」、「日本の女性の子育てを見て自分も出来ると思った。子どもがいても皆毎日お化粧をして綺麗にして凄いと思う」、「日本の育児環境はとてもよい。保育園もあるし小児科の予約も取りやすい、女性が働きながら子育てをする環境が整っている」という人々の意見が多く、仕事と育児を両立できなくなったら、仕事を一度辞めて落ち着いたらまた探すという日本的な意見もあった（奈倉 2021： 195）。

しかし、あくまでも「専業主婦」に対しては、否定的な考えを持っており、1950～60 年代生まれと異なる点は、キャリア追求よりも子育てを中心に出来る範囲で働く、と考えている点である（奈倉 2021：195）。

ただ、現代日本でも、一定数の人々は、専業主婦に対する疑問や不信を持っている人々は居る。実際に新卒で数年正社員として働き、結婚し、出産したらリタイアして、その後は専業主婦を続けるというケースがつい最近までは多くあり、それを社会的に否定する理由は全くないのである。そうなった場合、一番責任をとらないといけないのは、会社の人事なので、誰がリタイアしないかといったような雇用を人事はどうしてもしなければならない。

また、中国人女性に専業主婦といった観念がないのは、主婦同士のコミュニティ形成の難しさ、井戸端会議といったような「主婦たちのための社会」を作ることが困難になってくるのではないかといった側面もある。

終章　まとめ

第一の問題として敬虔な回族女性が居るコミュニティにおいて「女性の役割」はどういったように社会化しているのか、ということを挙げたが、女学の例を見る限り、回族コミュニティに「女性の役割」はしっかりとあり、実は彼女らにとってイスラームの教義というものでの繋がりが、漢族と自分たちを隔ててくれるものであり、目に見えないバリアになっているのではないだろうか。共に女学においてアホンとしての資格を共に目指すことなどが、ムスリムとしての繋がりだけではなく、学校内においての社会的友好関係にもなっている。

第二の問題として雲南省の敬虔な回族の婚姻を見てきたが、「ムスリムとしての女性の役割」についての明確なものがなく、今後の課題となる。もう一つ、この点に関しては敬虔な回族が漢族に社会化することを半ば世の風潮的に強要されてしまっていることも難点であり、今後の回族社会としての課題である。社会化することによって、女性の社会進出や回族男性の働きやすさを見出す可能性があるならば、もちろん、それも一つの手段ではあるのだ

が、信仰の自由については政府で保護されるべきであると思うのである。また、通婚については、宗教教育と普通教育の二つを受けている回族側に漢族が社会化するという面があり、希望的観測だが、今後漢族のイスラーム教育の担い手が増えていくことになれば、中国ムスリム社会も発達するのではないかと考える。

第三の問題点、義烏市の働く女性を通じて、労働という面でまだまだ中国女性の立場は厳しい。しかし、義烏市の回族女性のように、インターネットの普及の恩恵を受け、自分で道を開拓する者もいる。中国では、計画経済期に男女雇用促進政策が採られたが、中国政府も詳細な男女別データを多く公開してきたとはいえず、女性の職場進出は進んでいると捉えられることが多いが、その実態が見えない（石塚 2011：48）。

また中国では高齢化の問題も進んでいるが、田舎に行けば行くほど高齢化は遅れているという現象がある。上海市が 1979 年に最も早く高齢化社会に突入したが、寧夏回族自治区が高齢化社会を迎えたのは 2012 年であった。両者の間には 33 年の差がある。また、寧夏回族自治区、雲南省など、産児制限政策が比較的緩やかだった少数民族が多く住む地域、ならびに外来の労働者が集中する広東省、福建省などは高齢化の程度が相対的に低いというデータがある（陳 2017：7）。こういったことを踏まえると回族社会は、まだまだ若者が支教活動をしていかなければならず、回族の女性も出来るだけその教義を尊重して生きていくべきなのではないだろうか。

回族社会は変容しつつある。社会化する者も居れば、敬虔なままでいる者も居り、そうした混沌とした中国回族社会において、もやもやとした感覚を拭い切ってくれるのは、女性の圧倒的な社会進出であると思う。

敬虔な回族女性、社会化した回族女性と漢族女性の三者三様で、定められたコミュニティの中、はっきりと自分の役割を果たしている。敬虔な回族も信仰という中で、教義に基づきながらも自分のアイデンティティを発揮しよ

うとしており、マジョリティな漢族の存在とマイノリティな回族の存在がぶつかり合う狭間はあれども、各々のライフスタイルが形成されていくのではないかと考えられる。

参考文献

石塚浩美

2011「中国男女の就業に関する通説の検証と若年女性農民」『中国経済研究』第 14 号，中国経済学会，46-58 今中崇文

2011「回族の葬送儀礼から見る人々のつながり―中国・西安市の仏覚巷清真大寺における葬送儀礼を事例として―」『総研大文化科学研究』 7 号，25-45 高明潔

2002「中国ムスリム＝回族のダブル・アイデンティティ」愛知大学国際コミュニケーション学会紀要『文明 21』 9 号，125-162 澤井充生

2007「現代中国の異民族通婚：寧夏回族自治区銀川市の事例」『人文学報』378 号，77-93 澤井充

生

2010「回族の親族カテゴリーをめぐる覚書：寧夏回族区銀戦士の事例から」『人文学報』423 号，43-69 首藤明和

2021「回族の結婚と「個人化」「親密な関係」「コミュニケーション・メディア」「予期構造」―N・ルーマン構成主義的認識論からの結婚研究に対する新たな問い」愛知大学現代中国学会『中国 21』54 号，39-64 陳雲

2017「中国における高齢化の状況と就業問題」『労働政策研究・研修機構』労働政策研究・研修機構国際研究部研究交流課編，3-17 鄭楊

2012「市場経済の転換期を生きる中国女性の性別規範―都市主婦のインタビューを通して」落合恵美子・赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』京都大学出版会，153-174

東京都産業労働局観光部受入環境課編

2021『ムスリム旅行者おもてなしガイドブック―日本とイスラームをつなぐための 3 つのこと』東京都産業労働局観光部受入環境課，(2)，153 鳥山純子

2010「中東研究における助成身体の処遇―「交渉」を鍵とした研究動向分析」『人間文化創成科学論叢』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科，第 12 号，

277-285 奈倉京
子
2021「中国人の海外移住にともなう家族・ジェンダー観の変容―移住する男性の妻・嫁から自ら移住する妻・母への着目」坂部晶子編『中国の家族とジェンダー』明石書店，184-204 奈良雅史
2013「漢化とイスラーム復興のあいだ：中国雲南省における回族大学生の宣教活動の事例から」『宗教と社会』19 巻，33-47 奈良雅史
2016『現代中国のイスラーム運動：生きにくさを生きる回族の民族誌』風響社白
蓉
2015『回族婚姻価値観研究』寧夏人民出版社松本ます
み
2010『イスラームを知る７―イスラームへの回帰：中国のムスリマたち―』山川出版社横山廣子
1987 馬寅編、君島久子監訳『概説中国の少数民族』三省堂横山廣
子
1987「大理盆地の民族集団」『研究紀要（東洋英和女学院短期大学)』26 号，39-52
李之易
2018「中国における回族ムスリム女性のジェンダー役割に関する言説の創出と流通―浙江省義烏市における回族ムスリム女性を例として」『名古屋大学人文学フォーラム』名古屋大学人文学研究科，第１号，163-179 李之易
2021「浙江省義烏市における回族女性のジェンダー役割に関する語りと実践―女性のネットビジネス参入を中心に―」坂部晶子編『中国の家族とジェンダー』明石書店，
116-140

インターネット文献

「イスラーム法に基づいての結婚式」(2022 年９月 30 日（金）閲覧)
https://www.ahmadiyya-islam.org/jp/
「[コラム] 女性の社会進出の歴史とこれからの未来」(2022 年９月 30 日（金）閲覧)
https://map-on.co.jp/media/column-woman01/ 「ハラールフードとはイスラーム教の考え方と具体的な食品例を紹介」(2022 年 10 月２日（日）閲覧)
https://eleminist.com/article/1469